



暖冬



川崎ゆきお

「今年は暖冬でしょうかねえ」

「そうですねえ、暖かいですねえ。しかし、冬は始まったばかり、これから寒くなるかもしれませんよ」

「でも、スタートが暖かい。それほど寒くないです」

「スロースターターとも考えられます」

「後半伸びるタイプですね」

「冬の後半は春間近、だから、真冬の底に合わせてくるんじゃないのですか」

「じゃ、一番寒い時期、例年よりさらに強い寒さが」

「そんな年もありましたなあ。でも冬の初め頃はどうだったでしょうかなあ。そこまで覚えていません」

「長期予報はまだ見ていないのですが、どうなのでしょう」

「私も見ていませんよ」

「こう暖かいと、紅葉も長持ちするかもしれませんね」

「そうですねえ。少し遅れていますなあ。まだ青い葉が残っていたりしますしね。冬の訪れが、今年は遅いのかも」

「じゃ、春の訪れも遅くなると」

「さあ、それはどうでしょうか。冬が押して、春が遅くなることもあるでしょうが、それも記憶にありません」

「記憶に残るとすれば、どんな感じですか」

「え、何のです」

「ですから、春の訪れと、冬の始まりの遅い年との関係です」

「それは先ほど言いましたでしょ。印象に残るようなことがないので、記憶にないと」

「じゃ、どんな感じだと記憶に残りますか」

「そうだねえ。いつまで立っても冬が来なくて、秋が年末まで続いているような年でしょうか。梅雨頃まで冬のコートがいるような年でしょ。それは体験ありません。だから、想像です」

「冬がなかなか来ないより、春が来ない方が怖いです」

「そうですか」

「梅雨時なのに雪が降るとか」

「おお」

「その状態なら異常気象と言っていいでしょ」

「夏に雪が降るとだめ押しですね」

「完全に狂ってます」

「まあ、そんなことはないでしょ」

「ないですねえ。夏の雪なんて」

「あり得ませんが、高い山ならあるでしょ」

「万年雪に覆われているようなクラスの山ですね」

「短い夏。そして、それほど暖かいわけじゃない夏」

「そうですね。自分の住んでいるところを基準にするから、そう感じるのかもしれませんが」

「まあ、南極や北極や高山のことを心配しても仕方がないでしょ」

「それはまあ、そうです」

「結局は世界の中心は自分なんですよね」

「はいはい」

「私らは、この地で、暖かい目の冬を迎えているだけで、特に何もありませんが、暖冬で困っている人もいますよ」

「配慮が必要と言うことですね」

「まあ、ここで二人だけの会話ならいいでしょ。誰も聞いていない。それに、今年は暖冬で、暖かくて良い、なんてことが言えない状態の方が怖いでしょ」

「そうですね。感想を言っただけですからねえ。それに私ら、重要な立場の人間じゃないし」

「冬物衣料が売れないので、特価になってました」

「そうか、それはいいことを聞いた」

「買うなら今ですよ」

「いや、まだ高いはず。底は冬の終わり頃だ。そこまで私は待つ。まだ、その時節じゃない」

「はい」

了